

現代日本建築家の創作における隠喩的表現

同 ○戸田 啓太*
同 山田 深**

9.建築歴史・意匠-7.意匠論

現代日本建築家、比喩的表現、隠喩的表現、メタファー、KJ法、コレスポンドンス分析

1. 序

建築家が建築を表現する際に隠喩を用いることがある。建築家のル・コルビュジェは、「住宅は住むための機械である」^[1]という隠喩によって、当時の様式主義的な考えから逸脱し、機能主義への変化を広く一般に認知させただけでなく、本人の創作活動においても重要な標語とした。建築家の言説の中で扱われる隠喩は、設計意図の伝達を目的とするのみならず、創作における発想ともなるなど、建築を表現・思考する上で重要であり、本論において比喩の中でも隠喩を用いるのは、隠喩が人間の思考に関係が深いためである^[2]。

本編では、現代日本建築家の言説にみられる隠喩的表現が、どのような内容を建築のどの対象部位に用いているかを、言説を対象としてそれぞれ明らかにした後に、それらの対応関係について総体的に明らかにする。

2. 研究方法

2-1. 隠喩の定義

隠喩とは、具体的で基本的な概念である隠喩的表現によって、抽象的な概念に一連の構造が写されることで理解が成り立つプロセスのことである^{[3][4]} (図1)。

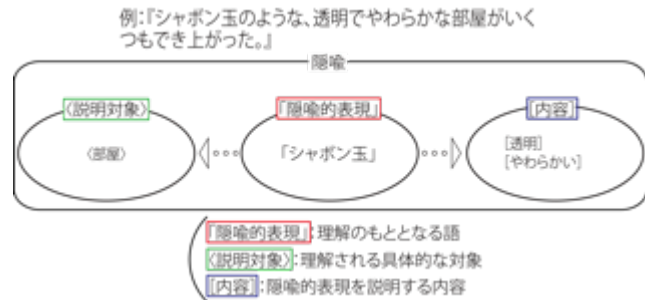


図1 隠喩の対応図

例えば、「シャボン玉のような、透明でやわらかな部屋がいくつもでき上がった。」という文章では、「シャボン玉」という表現によって「部屋」という抽象的な対象が「透明」[「柔らかい」]という内容として理解される。本研究では、「シャボン玉」のように理解のもととなる語を「隠喩的表現」、(部屋)のように理解の対象となる語を「説明対象」、[透明][やわらかい]のように「隠喩的表現」を説明する内容を「内容」とする。本研究での「隠喩的表現」は、岡河らの研究^[5]の「比喩表現」の categorie を参考に分類している。

2-2. 分析方法

本編では、現代日本建築家の隠喩を抽出したのち、「隠

喩的表現」(説明対象)[内容]それぞれに KJ 法的分類を行う。次編では、分類結果から「隠喩的表現」と「説明対象」また、「隠喩的表現」と「内容」でクロス集計表を作成し、コレスポンドンス分析^{[6][7]}を行うことで、対応関係を見ていく。また、それらを取りまとめ全体の考察を行う。

2-3. 研究対象・資料

現代日本を代表する建築家^[8]が用いた隠喩を研究の対象とする。隠喩は、『新建築』^[9]の作品解説から抽出しており、1960年から2016年までの57年間を資料として扱う。抽出された「隠喩的表現」の総数は590個であった。また、定義から隠喩を抽出していく上で、本論文では、「隠喩的表現」と「内容」及び「説明対象」が同時に述べられているものを抽出対象としている。

3. 隠喩的表現の総論

3-1. 「隠喩的表現」の分類

建築家によってどのような「隠喩的表現」が用いられているかを見るために、抽出した590個の「隠喩的表現」を KJ 法的に分類・整理した(表1)。

表1 「隠喩的表現」の分類表

隠喩的表現: 590	隠喩的表現: 590																								
	構造物: 133			人工: 189						自然: 185						抽象事物: 49			行為: 34						
現代分類	都市	建築自体	建築部位	玩具	芸術品	展示品	日用品	機械	乗り物	植物・石	自然	地形	宇宙	自然現象	生物	人体	状態	境界	時間	形式	芸術行為	一般行為	生存行為		
街	58	43	32	16	12	2	6	12	78	51	12	47	6	25	4	25	29	49	32	8	6	2	4	15	15
住居	17	14	11	4	5	1	6	5	36	39	9	9	3	6	4	9	7	17	21	3	6	1	2	4	4

■ 作品名
レストラン・マッカリーナ

■ 設計者
内藤 廣

■ 掲載年
1998.12

■ 設計者による作品解説
木造の骨組を、金属板と断熱材で包のようにくるんだシェルターのような建物をイメージした...

■ 写真

図2 「隠喩的表現」の抽出例

「隠喩的表現」は、「構造物」「人工」「自然」「抽象事物」「行為」の5つの大分類に分けられる。以下では、傾向が見られたものについて見ていく。「構造物」という大分類の中で多く見られる「隠喩的表現」は、「建築自体」の中の「住居」という分類であり、12名により14回扱われている。この分類では、「家」や「民家」また、特定の地方の住居である「包」という「隠喩的表現」も見られる(図2)。「玩具」や、「日用品」「芸術品」などの、人間の手によって作られたものの大分類である「人工」の中では、「機

械」という中分類の中の「装置」が最も多く見られ、19名によって39回扱われている。これは、抽出した中で最も多く扱われた「隠喩的表現」であった。「装置」の中には、「装置」をより限定的に扱った「舞台装置」などが見られる。「自然」の分類の中では、「人体」という分類の中の「皮膚」という「隠喩的表現」が多く見られる。「皮膚」は、8名によって17回扱われている。具体的には、「皮膚」や「皮膚」などの表現が見られる。「抽象事物」の分類の中で多く見られる「隠喩的表現」は、「状態」という分類の中の「余白」であり、8名によって21回扱われている。人間の行為に関する「行為」という大分類の中では、「芸術行為」「生存行為」などの分類が見られ、「生存行為」の中には、「呼吸」や、さらに限定的な「深呼吸」、また、「成長」などの「隠喩的表現」も扱われている。

3-2. 〈説明対象〉の分類

建築家によってどのような〈説明対象〉が用いられているかを見るために、抽出した558個の〈説明対象〉をKJ法的に分類・整理した(表2)。

表2 〈説明対象〉の分類表

説明対象: 558	建築部位: 186													壁	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別			
	都市性	建築性	構造	屋根	天井	設備	階段	開口部	塔	床	壁	次上げ	地下										素材	インテリア	内外空間
	1	140	95	18	9	10	4	16	3	4	3	1	2	12	4	5	91	23	61	3	35	11	3	2	2

■ 作品名 リアス・アーク美術館	■ 設計者 石山 修武	■ 掲載年 1994.10
■ 設計者による作品解説 この地域の全体を、より深くより明確に眺め、そして考えてもらうための装置としても考えられた。		■ 写真

図3 〈説明対象〉の抽出例

〈説明対象〉には、9つの大分類が見られ、全体の中で最も多く見られた〈説明対象〉である〈建築性〉は、建築の全体性について扱われたものを指し、38名の建築家によって扱われており、本論で扱った大半の建築家によって対象にされている(図3)。また、次に多く扱われた〈説明対象〉は、〈建築部位〉の中の〈壁〉に対してである。〈壁〉の分類の中には、〈内壁〉と〈外壁〉が見られる。

3-3. [内容]の分類

[内容]は、大きく【現象】と【状態】の2つに分かれた(表3)。「【現象】とは、建築がつくりだす事象について述べられた[内容]のことであり、【状態】とは、建築自体の有り様について述べられた[内容]のことであり。これらの分類の中にはさらに小さな分類が見られる。「【現象】は、[調和][対立][調和・対立]があり、「【状態】は、[様子][感情]また、両方に関わる[調和・様子]という6つに分けられる。以下に、傾向が見られたものについて見ていく。[調和]は、建築における融和的な[内容]のことを指す。この分類の中で最も多く見られる[内容]は、[繋ぐ]であり62回扱われている。[繋ぐ]の中には、[物

理的に繋ぐ]や、[心理的に繋ぐ]や、[緩やかに繋ぐ]など、程度について述べられているものが見られる。一方で[対立]は遮断的な[内容]を指す。この分類の中で最も多く見られた[内容]は、[切る]であり14回扱われている。[切る]の中には、物理的に[切る]や、視線を切るなどの心理的に[切る]などが見られる。[調和・対立]は、[調和]と[対立]を同時に含むものであり、[抽象化]に関する[内容]が多く見られる。[抽象化]は、光を取り込み、視線は切るなどの、ある側面は遮りつつ、ある側面を取り込むという[内容]によるものである。「【状態】の中の[様子]は、印象に関して述べられた[内容]のことであり、[存在しない]は、最も多く見られた[内容]であり、複数の建築により18回扱われていた。[存在しない]は、字義通り何も存在していない印象に対して扱われている[内容]のことであり。[感情]は、人間の感情に関して述べられた[内容]を指す。この分類の中で最も多く見られる[内容]は、[正の感情]であり33回扱われている。[正の感情]には、[豊か]や[落ち着いている]などがある。「【調和・様子】の中で最も多く見られる[内容]は、[複数存在する]であった。[複数存在する]の中には、[複雑な]などの[内容]が見られる(図4)。

表3 [内容]の分類表

[内容]: 590	現象: 339																						種別: 建築																																
	調和: 244																																																						
	繋ぐ	集める	出す	変化する	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	自然に建つ	62	23	16	14	11	10	10	9	9	9	8	7	7	6	6	6	5	4	4	3	3	3	2	2	2	2	1						
	現象: 339														種別: 建築																																								
	対立: 38							調和・対立: 31							その他: 27			種別: 建築																																					
	切る	守る	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	繋ぐ	14	7	6	5	3	2	1	14	8	7	5	4	4	4	2	4	3	3	1	1	1	24	8	8									
	状態: 278																																																						
	様子: 169																感情: 48				その他: 61																																		
	存在しない	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	美しい	18	16	16	13	13	12	10	9	8	8	6	5	4	4	4	4	3	2	2	1	1	1	1	1	33	10	2	1	1	1	10	3	1

■ 作品名 TIME'S	■ 設計者 安藤 忠雄	■ 掲載年 1985.02
■ 設計者による作品解説 幾何学的に単純化された全体に迷路のような複雑さを与える。		■ 写真

図4 [内容]の抽出例

4. コレスポネンス分析による対応関係

4-1. 「隠喩的表現」と〈説明対象〉の対応関係

「隠喩的表現」と〈説明対象〉のクロス集計表を作成し、それに対してコレスポネンス分析^[10]を行った(図5)。以下に一例を示す。「街」は〈建築性〉と相関が見られる。

〈建築性〉とは、建築の全体性について述べられる〈説明対象〉のことを指し、ここでは、「街」という表現が、建築の部位などの〈説明対象〉を指すことより、建築の全体を指す傾向の方が多く見られることがわかる。

4-2. 「隠喩的表現」と[内容]の対応関係

「隠喩的表現」と[内容]のクロス集計表を作成し、それに対してコレスポネンス分析を行った(図6)。「雲」は[自由]と相関がみられた。この例では、「雲」という「隠喩的表現」によって建築の形を[内容]としており、同時に、「雲」の形状が、人が[自由]に動くさまを[内容]としていることがわかる。また、「スクリーン」という「隠喩的表現」は、[繋ぐ][切りつつ繋げる][和らげる][集める]など複数の[内容]との相関が見られた。例えば、BIGI Atelier IIIでは、「スクリーン」により、[建物と街とを柔らかく関係づける]という[繋ぐ]に関する[内容]を示している。「スクリーン」と相関の見られた[内容]は、いずれも【現象】に関する[内容]であるという傾向が見られた。

また、「街」は[距離をとる]と関係がみられ、例えば、教室同士が[距離をとる]という[内容]で、教室の配置がなされていることを「都市」という「隠喩的表現」によって表現している。

4-3. それぞれの対応関係

4-1、4-2より、どちらにも相関が見られた「隠喩的表現」を中心としてパターンを作成した(図7)。以下では代表的なパターンについて見ていく。

《パターンA》では、「スクリーン」という表現は、〈壁〉に対して用いられ、[写す][和らげる][切りつつ繋げる]という[内容]を表現するという傾向が見られる。[写す]は、[調和]に含まれる[内容]であり、[和らげる][切りつつ繋げる]は、[調和・対立]に含まれる[内容]である。このことから、「スクリーン」は〈壁〉に対して用いられ、[調和]との関係が深いと言える。

《パターンB》では、「装置」という表現は、〈塀〉〈吹抜け〉に対して用いられ、[受ける][演出する][複数存在する]という[内容]を表現するために用いられる傾向が見られる。[演出する]と関係が見られたのは、「舞台装置」という、演出に関する「隠喩的表現」の影響が窺える。また、他にも複数の[内容]との相関が見られたことから、[内容]が固定されていない「隠喩的表現」であることがわかる。

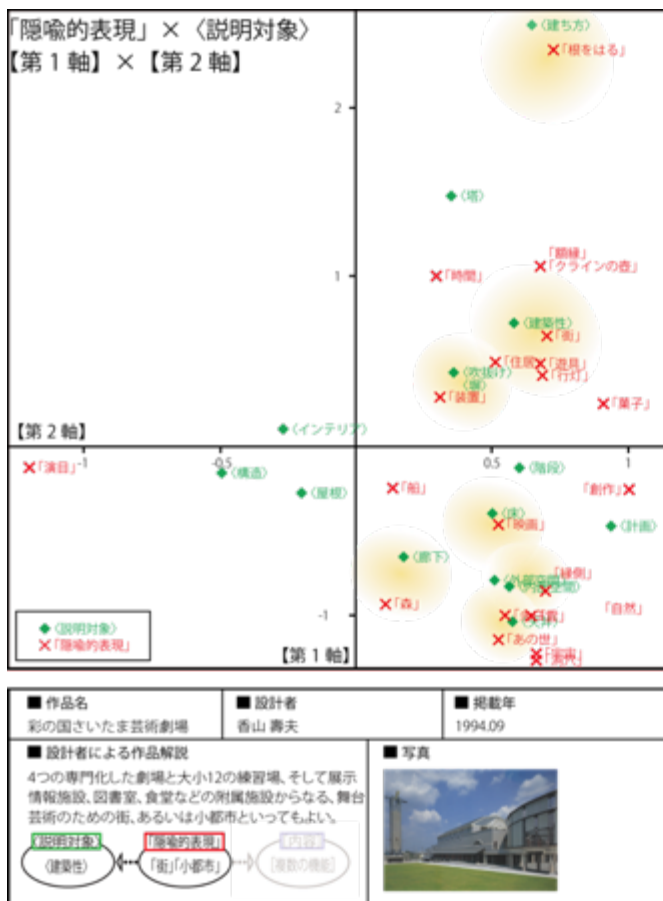


図5 「隠喩的表現」と〈説明対象〉によるコレスポネンス分析(1軸×2軸)とその例

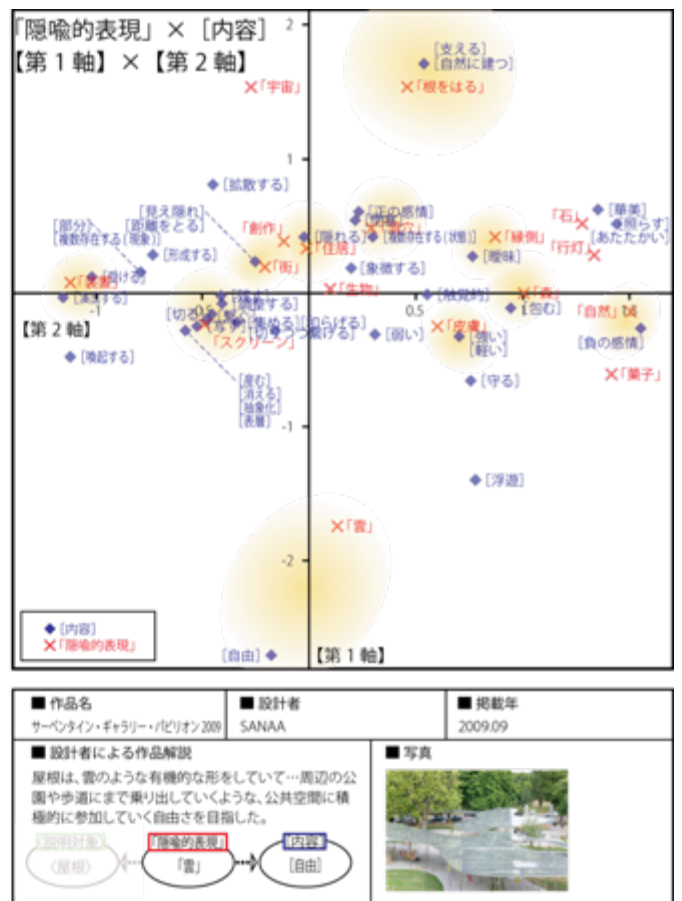


図6 「隠喩的表現」と[内容]によるコレスポネンス分析(1軸×2軸)とその例

《パタンC》では、「石」という表現は、〈形態〉に対して用いられ、[華美]を表現するために用いられる傾向が見られる。ここでは、「石」という「隠喩的表現」の中でも、「水晶」や、「宝石」などの加工されたものなど、宝飾品が多いことが、[華美]に関する[内容]が多い理由だと考えられる。

《パタンD》の、「縁側」は、〈内部空間〉〈外部空間〉に対して用いられ[曖昧]を表現するために用いられる傾向が見られる。「縁側」という「隠喩的表現」が〈内部空間〉〈外部空間〉と関係が深いのは、縁側の持つ建築的な特徴が関係していると考えられる。

《パタンE》の、「皮膚」は〈壁〉に対して用いられ、[軽さ]を表現するために用いられる傾向が見られる。これは、人間の外気に触れる最も外側にある部分が皮膚であることと関係があると考えられる。

《パタンF》の、「洞穴」は、〈内部空間〉に対して用いられ[閉塞]を表現するために用いられる傾向が見られる。また、[心地よい]などの[正の感情]とも相関が見られることから、【現象】【状態】どちらも関係が見られた。

5. 結

本研究では建築家が用いた隠喩を、「隠喩的表現」〈説明対象〉[内容]それぞれの側面から見たのち、それぞれの対応関係を明らかにした。結果、現代日本建築家の用いる隠喩の傾向の一端を明らかにすることができた。

〈注釈・参考文献〉

- [1]ル・コルビュジェ、『建築をめざして』,鹿島出版社,1967
- [2]G.レイコフ,M.ジョンソン,『レトリックと人生』,大修館書店,1986
- [3]大堀 壽夫,『認知言語学』,東京大学出版会,2002
- [4]本論で扱う隠喩は、認知言語学の分野から参照している。
- [5]山根 俊輔,今掛 壽大,岡河 貢,『現代建築における比喩表現の研究』,日本建築学会大会学術講演梗概集(東北),2009
- [6]Sten-Erik Clausen, 藤本一男,『対応分析入門 原理から応用まで』,オーム社,2015
- [7]対応分析は、クロス集計表を用いて、元データの重要な情報を失うことなく、結果を視覚的に提示するものである。つまり、空間にポイントが配置され、似ているものは空間内で近接して配置され、似ていないものは離れて配置される。絶対的なものではなく、ポイントの相対的位置に基づいて解釈される。また、原点に近いほど複数のものと関係がある。
- [8]ブリッカラー賞、日本建築学会大賞、日本建築学会作品賞のいずれかの受賞者から選出する。日本建築学会作品賞については、『新建築』の掲載作品数が20作品上記ある者として、61組の建築家を対象とし、総作品数2779作品を抽出する。
- [9]資料は、実現した建築作品のみを扱う。
- [10]コレスポンデンス分析には、固有値が存在する。固有値は、得られた軸が全体をどの程度説明しているかを示すものであり、本論で扱っている「隠喩的表現」と〈説明対象〉においては、1軸×3軸までで、全体の47%を説明している。また、「隠喩的表現」と[内容]においては、1軸×3軸までで、全体の24%を説明している。

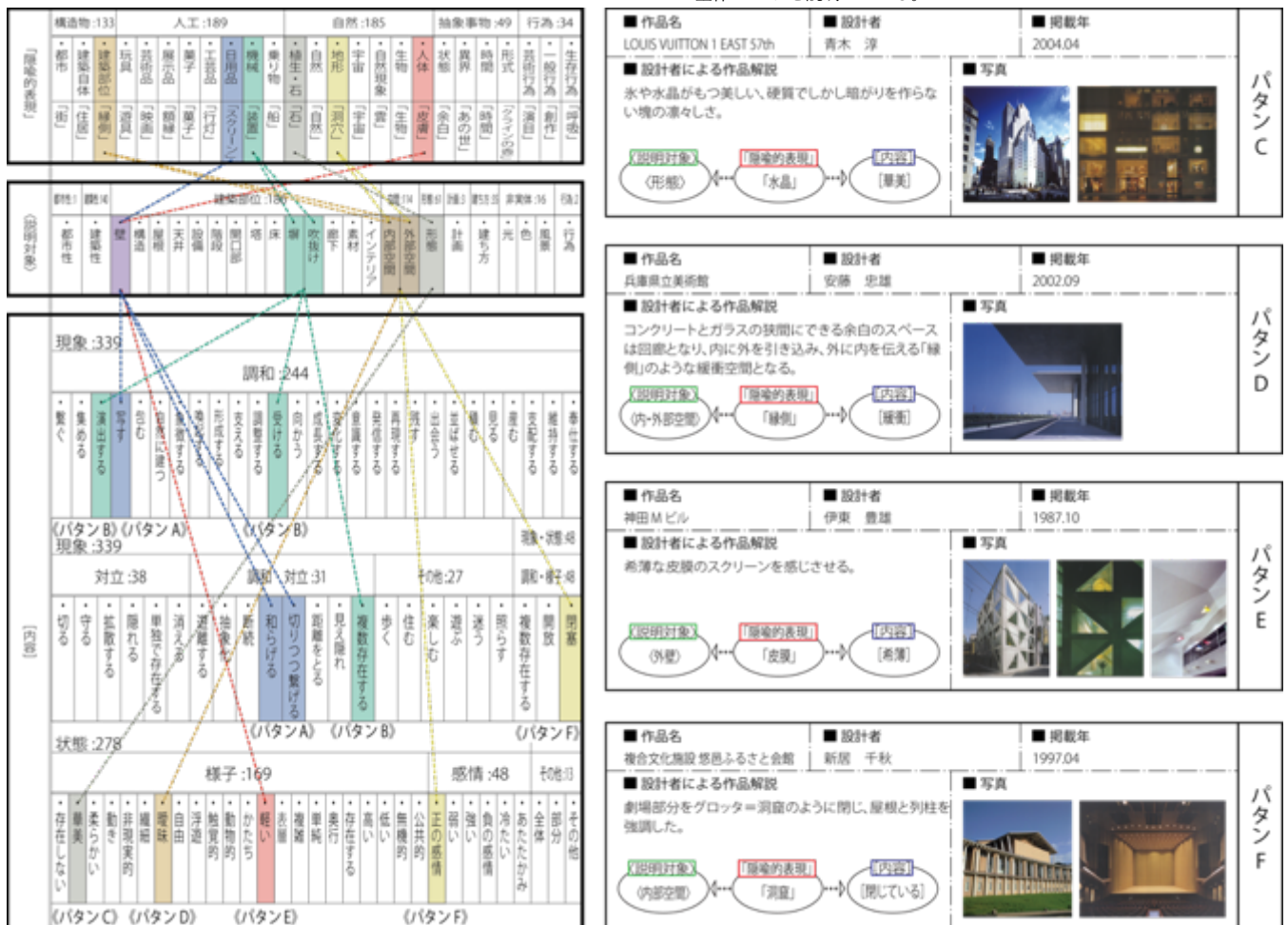


図7 「隠喩的表現」〈説明対象〉[内容]によるパタンとその例

* アトリエ ブンク
** 室蘭工業大学大学院 准教授

*Atelier BNK
**Assoc.Prof.Muroran Institute of Technology